■研究十二月往来〈138〉

〈右流左止〉・〈いぐゐ〉の難語

―天理本狂言六義の注から―

田口和夫

和泉流の最古本天理本には、国語学者の北原保雄・小林賢次両氏による『狂言六義全注』（勉誠社）があって、だれでも見ることができるようになった。一方、北川忠彦氏を中心として私ども狂言研究者が三弥井書店の中世の文学シリーズの一つとして飜刻・注を出そうという作業が進行していた。共同作業の常として遅れ遅れとなり、ようやく上冊が刊行される運びになったが、遅れた分、新しい成果を盛り込むことができたと考えている。私担当分の中から、そのような新発見の一部分を記しておこう。

「しわくの藤蔵」（〈右流左止〉）

狂言〈右流左止〉の原形は天正狂言本に収められる〈きんみつ（公光）〉である。これは能〈雲林院〉によって前半が作られている。この三者の関係については、北川忠彦氏に論があるのでそのことには触れない。登場するのは能のワキと同じ、歌道・伊勢物語をよく知っていると称する津の国芦屋の里の公光である。〈右流左止〉は〈雲林院〉から離れて、「むさしあぶみ」の歌に菅丞相遠流の語りを加えて再構成したものだが、芦屋の公光の代わりに「西国にかくれなきしわくの藤蔵」と名乗る男が登場することが注目される。狂言三百番集では「塩飽（しゅあく）の藤造」と記す。『全注』の注で、

「しわく」は瀬戸内海の「塩飽（しわく）諸島」をさす

とするのは、三百番集などの文字遣に拠ったのであろう。しかし、公光と同じく古典に明るいはずの藤蔵が、水軍・海賊で有名な「塩飽」を名乗ることは、何としても違和感がある。今回、注を付けていて諸本を見合わせたところ、次代の波形本に「詞伯の藤蔵」とあることが目に留まった。「詞伯」は日本国語大辞典に次のようにいう。

（「伯」はかしらとなる人の意）詩文をよくする人。詩文の大家。また、その人を敬っていう語。詞宗。宋之問傷王秘書監詩「書乃墨場絶、文称詞伯雄」

もう一つ、詩の大家を意味する「詩伯」の語も見えるが、ここは、伊勢物語にその話があるかないかを論じ、菅原道真の故事を語る人物としては「詞伯」がふさわしかろう。「しはく」と書かれていた語がその原義を忘れられて「しわく」と発音されるようになることは有り得ることである。この語は古く中国で用いられているだけでなく、江戸時代にも結構用いられる言葉だった。日本古典文学大系『近世文学論集』所収の山本北山著天明三年刊『作詩志穀』に、この語についての考証がある。

俗ナル書トハイヘドモ、華人ノ手ニ出タル、尺牘集要ニモ、詩人ニ大詩伯・大詩宗ト称スルコトアリ。又卓氏藻林ニモ、詞伯ノ称ヲ出セリ。（中略）詞伯・詞宗ノ称ハ、識者ノ好ンデ用ユベキコトニハ非レドモ、其人ヲ賞誉シテ、文詞ノ宗伯ト称スルナレバ、道理ナキニ非ズ。（337・8頁）

その人が詩文の大家であることを誉めて「詞伯」と称するという。「公光」が藤六などを連想させる「藤蔵」に変えられた時、公光と同様に詩文の大家であることを強調して「詞伯」という形容を付けたのであろう。ただし、「識者」が用いず、しかも他人を誉めるために用いる語を、自称の語として用いたことになる。「藤蔵」という名にふさわしいコミカ

ルな気分が付加されていると言えよう。それにしても「詩伯」は普通の言葉ではない。改作に当たっては道真説話にも親しい学者の手が加わっていたと考えてよいだろう。

〈いぐゐ〉の呪文

姿が見えなくなった「いぐゐ」を探そうと「卜や算」（陰陽師）が算木を置きながら唱える呪文については、後代になるほど調べが行き届いてくるが、それでも不明とされる事が多かった。『全注』がきちんと用例をあげて説明していない部分は次の通りである。

①たんてうけんろぎんなんば

②一遊こん　二ぜつめい　三くわがい　四てんい　五福徳　六遊年　七生家　八ぜつたい

③だじやうだんに　こんかいれん

①については、寛政有江本では「禁難半短長顕」とするが、根拠は明確でない。②と③はそれぞれ「いぐゐ」の居る所を探り当てる卦の言葉という事になっている。

②は続群書類従雑部八十に収める『掌中歴』（三善為康撰）の「八卦」の項（『二中歴』第五にも同じ形で収められている）に、

遊年　禍害　絶命　鬼吏　生気　養者　天医　福徳　衰日

とあるのに相当するであろう。比較すると天理本の「一遊魂、八ぜつたい」と、『掌中歴』の「鬼吏、衰日」が対応しないことと、全体の順序が異なるが、他は同じである。なお虎明本には「遊年」だけが見える。

③は『掌中歴』に先行する『口遊』（源為憲撰、続群書類従所収）の「陰陽門」に、

離中断。坎中連。乾皆連。坤皆断。兌上断。艮上連。巽下断。震下連。

として「謂之八卦」という。これは『掌中歴』・『二中歴』にも、「方隅歴」として図を掲げ、北から時計回りで「離中断、坤皆断、兌上断、乾皆連、坎中連、艮上連、震下連、巽下断」としているものと同じである。天理本に見えるものは、「兌上断に、こん皆連」となり、「こん」は「坤」か「艮」だが、八卦によれば「乾」の誤りである。有江本は「兌上断、巽下断、乾皆連」として正しい。ここで天理本では「左ノスミヲ云」と注しワキ座を探すが、占や算が南を向いていないと、左前の隅が「乾皆連」にならない。「方隅歴」では「兌上断」が西、「乾皆連」が西北に位置しているからである。天理本ではそこまで理解して卦の言葉を用いてはいないのであろうか。

また、『口遊・掌中歴』には「一徳。二儀。三生。四殺。五鬼。六害。七傷。八難。九危」も見え、これを「九害」と言う。これを組み合わせたのが『全注』の指摘する『運歩色葉集』などの説である。

（文教大学教授）